

TOEIC の不思議な世界を学ぶ —CLIL を用いた TOEIC 教授法の提案—

Learning a bizzare world of TOEIC
A proposal of teaching TOEIC in CLIL

伊藤 雄馬
ITO Yuma

大学教育において、TOEIC の需要は高まる一方である。しかし、TOEIC を扱う講義は問題演習中心の講義が依然として多く、本当の意味での英語力を高める授業内容にするためには工夫が必要である。本稿では、近年注目される内容言語統合型学習（CLIL: Content and language integrated learning）を用いた TOEIC 講義の実践例を報告する。TOEIC の問題文において、問題を成立させるために、特殊な状況が現れることが知られている。これは、遅延アナウンスを出題するためと言った、問題作成に関わる制約のためである。このような TOEIC 問題文の特徴を「TOEIC の謎」として再解釈し、その制約と関連する社会問題と関連させることで TOEIC 講義内において CLIL 的講義を実現させる授業例を紹介する。この実践は、TOEIC 対策講義の陥りがちな負の波及効果を抑えられるだけでなく、高次スキルの養成を可能にすることが期待できる。

キーワード： TOEIC、CLIL

1. はじめに

1.1. 大学における TOEIC 講義の問題点

本稿の目的は、大学での TOEIC 講義に近年注目される CLIL（内容言語統合型学習）を用いて授業を行い、TOEIC の講義の多様化と深化を試みることである。

日本での TOEIC（Test of English for International Communication）の需要は各方面で高まっている。国際ビジネスコミュニケーション協会（2013:8）によれば、2013年時点で63.2%もの上場企業が、TOEIC のスコアを採用や昇進の基準に用いている。教員採用試験においても TOEIC は活用されており、富山県では、英語を専門としない小・中・高・特別支援学校の一次選考において、730点以上で第一次検査の総合得点に5点の加点を認めている（国際ビジネスコミュニケーション協会 2016）。日本の高等教育機関でも、580校が TOEIC を入学試験に活用し、501校が単位認定に活用している（国際ビジネスコミュニケーション協会 2016）。

しかし、教育現場へのTOEICの導入は、様々な問題が報告されている。例えば、TOEICの難易度が大学の講義に相応しくないとするものである。Newfield (2005:90) は、TOEICが一部の生徒にとって難しすぎる、というアンケート結果を得ている。他の研究においても、TOEICが初級学習者には相応しくなく、基礎的な項目の学習を優先すべきであるという指摘がある (Takahashi 2012)。

いくつかの研究によれば、TOEICの難しさは文法ではなく語彙にあると言う。田中 (2017) によれば、TOEICの文法問題は、大学生にとって既習事項がほとんどであり、TOEICに特化した文法問題というのはほとんど存在しない。一方、語彙については、高校卒業の時点で学習可能とされる語彙数と、TOEICで必要になる語彙数の間には大きな開きがあることが指摘されている (cf. 竹蓋・中條 1993, 中條 2003)。

学生が感じる語彙の難しさは、その語彙にまつわる背景知識が不足していることが主な原因の一つと考えられる。TOEICは、ビジネスに携わる人が日常で用いる英語についての能力を問うテストである。よって、例えば、TOEICに頻出する社内部門に関する語彙は、一般的な会社の組織図を知らない学生には馴染みがない。こういった背景知識の不足が、TOEICに登場する語彙を学生が難しく感じる原因であろう。つまり、TOEIC対策としては、単に語彙を学ぶだけでなく、その背景知識となる「ビジネスマンの日常」やそれにまつわる知識を学ぶ必要があるとことも必要であろう。

1.2. TOEIC 講義における CLIL の導入

本稿では、大学教育におけるTOEIC講義が抱える問題に対して、内容言語統合型学習、いわゆるCLILを用いることを提案する。CLILとは、Content and Language Integrated Learningの略語であり、簡単に言えば、語学学習と教科学習を統合させることを目指したものである。目標言語自身ではなく、教材やテーマなどの内容のあるものを学習の中心に据え、オーセンティックな教材を用いて、聞く・読む・話す・書くの4技能統合型のタスクを行うことを特徴とする (池田2011:12)。

CLILをTOEIC講義に導入することで、学生に不足している背景知識を学習させようとしたものに、Uemura (2013)と間中 (2015) が挙げられる。

Uemura (2013) は、大学生や社会人を対象としたTOEICの準備クラスにCLILを導入した。全体で24レッスンのうち、奇数回をCLILの方法論で教授し、偶数回はスピーキング、ライティングといったアウトプットに力点を置く講義とする授業設計を行った。内容として、「会計検査官 (auditor) 」の役割やファイナンスについて学ぶこととした。マテリアルは、TOEIC教材とファイナンスの教科書、また筆者の経験談を用いた。調査は、講義内の観察と、アンケートによってデータを得て、分析がなされた。その結果、モチベーションの増加と、語彙とその背景知識に関する理解度の上昇が観察された。

間中 (2015) は、大学でのTOEIC対策講義にCLILを導入し、TOEICの設問からビジネスで用いられる状況に焦点をあてた授業を、半期の講義15回のうち複数回行った。TOEICの問題の他に、背景知識の強化に必要なニュースなどを追加教材として取り上げ、学生にディスカッションを行わせた。学生へのアンケートを分析した結果、モチベーションの増加が認められた。

先行研究の結果では、TOEIC 講義において CLIL を用いることで、モチベーションの増加が見られることがわかった。これは、CLIL を導入した授業において、よく観察される結果である。言語形式や文法という、分析的な学習を好む学習者はごく限られており、オーセンティックな内容を様々なスキルを駆使して学ぶ

ことになる CLIL の講義では、より幅広い学習者の強みが活かされる機会が用意される結果、学習者のモチベーション増加が認められると考えられている。

また、大学における TOEIC 教授の課題であった、学生に馴染みのない語彙の定着について、深い理解度の上昇が観察できたことは意義のあることである。その他にも、問題演習中心の講義を脱して、4技能統合型タスクが可能である。問題演習中心になりがちな TOEIC の講義において、「応用」「分析」「総合」「評価」などの高次のスキル、いわゆる HOTS (Higher Order Thinking Skills) の養成がはかれる点も、CLIL を TOEIC の講義に応用する利点と言える。

CLIL を TOEIC 講義に応用する利点はあるものの、応用する際には注意すべき問題はいくつか挙げられるだろう。その一つに、オーセンティシティの問題があげられる。CLIL を実践するためには、オーセンティックな英語のインプットがほぼ前提となっている。しかし、TOEIC で登場する英文は試験問題という制約を受けたものであり、その点オーセンティシティに欠ける。実際、Uemura (2013) では、TOEIC の問題以外の英語で書かれた教科書を教材として用いたり、個人の体験を英語で学習者に話すことで、そのオーセンティシティを確保していた。

ただし、Uemura (2013) のような対応を例外的である。多忙を極める教員にとって、オーセンティックな教材探しは、簡単ではない。個人体験にしても、海外経験の豊富な教師には可能であろうが、その経験を教員全員に求めるのは現在の日本の教育界を見る限り、現実的ではない。

加えて、オーセンティシティを重視するあまり、扱う英文が TOEIC に登場する英文から離れすぎるのも、TOEIC 対策講座としては疑問符がつく。つまり、TOEIC の問題を用いながら、オーセンティシティにも配慮した CLIL が求められる。では、TOEIC におけるオーセンティシティとは、どのようなものであろうか。次節では、TOEIC のオーセンティシティについて考える。

1.3. TOEIC のオーセンティシティ

TOEIC のオーセンティシティについて議論する前に、まずオーセンティシティを定義する。英語教育用語辞典 (2009:28) によれば、「外国語学習用として意図的に作られた教材ではなく、現実に存在する事物をテキストや音声教材としたもの」とある。この定義に従えば、オーセンティシティを高めるためには、教材選びの段階で配慮するしかないことになる。

しかし、教材が「オーセンティック」であることと、講義がオーセンティックであることは別である。千田 (2018) は、オーセンティックな英文を講義に用いたとしても、その運用によっては、必ずしもオーセンティックな講義にならないことを指摘した。その上で、講義のオーセンティシティを高めるためには、「脱文脈化された」英語を「再文脈化していく過程」が講義内で必要であることを主張している。

本稿も、千田 (2018) の主張に同意する。つまり、講義の「オーセンティシティ」は教材のみに依存せず、授業運営に関係するという立場をとる。

TOEIC は、2016 年から新形式となり、様々な変更がなされた。その変更は、総じてオーセンティシティをあげるものになっている。例えば、リスニングにおいて、“Well…” といひ淀みや、“You know” などのいわゆるフィラーが現れたこと、会話文問題では 2 人の会話しか登場しなかったのが、3 人の会話が入ったこと、また図表を見ながらリスニング問題を解く設問が追加されたことなどがあげられる。この変

更は全て実際の英語使用実態に合わせたものであるものと考えられ、このことから、TOEICのオーセンティシティは高くなっているということができよう。

しかし、依然として TOEIC は試験問題であるため、自然な英語ではない。例えば、リスニングの会話問題で、会話は 40 秒程度であり、会話の構造も「問題発生→解決」という流れで展開する。これは問題を出題するためであり、どの会話も必ずこのような構造を持つ。オーセンティシティを高める一方で、試験問題という制約は、時に特異な英文の特徴を示す結果となる。このように、TOEIC が試験問題であるがゆえに抱える英文の特徴については、TOEIC 対策本と呼ばれる本が詳しい。次節では、いわゆる「TOEIC あるある」を扱った本を紹介する。

1.4. 『不思議の国のグプタ』

TOEIC講師のヒロ前田と小説家の清涼院流水による『不思議の国のグプター飛行機はいつも遅れる』は、TOEICに登場する特殊な状況を揶揄した小説である。例えば、この本の副題にもあるように、TOEICの世界に登場する飛行機は必ず遅れる[1]。これは、飛行機が遅れる際のアナウンスの内容を問う問題を出題するためである。作中では、このTOEICの特徴を利用し、TOEICの世界に生きる登場人物のグプタが、飛行機がいつも遅れるというような「不思議な」状況に気づいていく様を描いている。

TOEICのこのような「不思議な」特徴は多く存在し、作品中でもたくさん紹介されている。本稿では、従来では「オーセンティシティを下げる TOEIC の滑稽な特徴」としてしか捉えられないこの TOEIC の特徴を、「問題作成者の制約」もしくは「社会からの要請」として捉え、TOEIC の講義で社会的な問題を取り扱い、TOEIC の問題文を「再文脈化」することを目指した講義を展開することが可能であることを示す。以下では、写真描写問題に「不思議な」特徴を用いた講義例を紹介する。

2. 授業実践例

2.1. Part1 の写真描写問題を用いた講義

TOEICのPart1は、写真描写問題である。写真を見ながらリスニングを行い、その写真を描写する英文としてもっとも適切な英文を選ぶ問題である。写真には、人や風景が映され、様々なものが写っているため、そこは一見現実世界と変わらないように思える。しかし、現実世界にあっても、写真描写問題の写真に登場しないものがいくつか存在する。

例えば、Part1の写真には、お酒やタバコが登場しない。ヒロ・清涼院 (2013:注31)によれば、アルコールやタバコをタブー視している人々への配慮によって、出題者が意図的に出題を避けていると推測している。

この「不思議な」特徴を、TOEICの隠された謎として、学習者に考えてもらうのが講義の導入となる。

具体的な実践例を以下に紹介する。し対象はTOEICをこれから受ける初学者を想定とする。まず、TOEIC の写真描写問題の出題形式を確認し、問題演習をする。そのあと、TOEICの問題で出題される写真と、出題されない写真を混在させて学習者に見せる。つまり、TOEICで使用された写真と、アルコールやタバコが登場していない写真を混ぜて渡す。

その写真を用いて、ペアかグループでShow and Tellを行い、写真の中に登場するものを描写させる。Show and tellが終わった後、「この中にTOEICの世界ではない写真が混ざっている。それはどれか?」という発問を行う。個人、またはグループでこの発問について考えてさせる。適宜ディスカッションを行ったあと、教室全体で意見交換を行った後、「アルコールやタバコがTOEICの世界には存在しない(=登場しない)」ことを伝える。

そのあと、「なぜTOEICの世界にはアルコールとタバコが存在しないのか?」という発問を行う。また、加えて意見交換を行ったあと、日本でメディアからタバコやアルコールの宣伝が消えている現状について話す。公共電波におけるタバコやアルコールの取り扱いについては、各国で異なる規定が存在する。例えば、タバコの包装にタバコの危険性を示す写真の表示を実施する国が2010年には34ヶ国だったのに対し、2015年は77ヶ国に増えているなど、タバコの宣伝規制は、日本ではまだ見られないものの、国際的には主流となっている (cf. 戸次 2015)。

このように、「TOEICに登場する写真にはタバコやアルコールが存在しない」というTOEICの「不思議な」特徴を入り口に、タバコの規制とその国際情勢について講義を展開できる。

3. おわりに

大学教育にTOEIC講義が導入されて久しい。しかし、TOEICを歓迎しない大学教員は多い。その理由の一つとして、TOEIC対策講座は負の波及効果を免れえず、英語技能の向上という目的から離れてしまいかねないという危惧が挙げられよう。筆者もTOEIC教育に頼らない英語教育を実践するのが理想的であると思う。しかし、冒頭でも述べたように、TOEICの学生需要は年々高くなっており、その要請を教師側の理念によって退けることは、それがいかに正しい理念だとしても、教育者として誠実な対応とは言えない。であるならば、残された道はTOEIC講座によって、英語力を高める工夫のみである。

本稿はTOEICの「不思議な」特徴を「TOEIC世界の隠された謎」として再解釈し、現実世界の問題とリンクさせることによって、CLILを用いた教授方法を提案した。オーセンティックな英語に触れることは、英語力の向上に必要不可欠なのは言うまでもない。しかし、外国語教育でより重要だと筆者が考えるのは、与えられた文章では排除されているリアリティを、現実の知識や経験を基に再文脈化する能力の養成である。目標言語に限らず、文章を読むことは、その背後にある前提を理解しながら読むことが求められる。TOEICに隠れた謎を考察することは、TOEICの問題にも触れつつ、取り組む英文の「再文脈化」を行う態度を実践すると言う点で、これまでのTOEIC教育に新しい方向性を示すものと考えられる。

参考文献

Cheng, L., & Watanabe, Y. eds. (2004). *Washback in Language Testing: Research Contexts and Methods*. Routledge.

千田誠二. (2018). 英語教育におけるオーセンティシティの再考察: ナラティビティを基軸として.

田中誠 (2017) 「TOEIC テストから考える中学英文法の重要性と指導内容」『長崎国際大学論叢』17, 13- 21.

竹蓋幸生 & 中條清美 (1993) 「学習語彙の有効度」『言語行動の研究』3, 116-122.

国際ビジネスコミュニケーション協会(2013) 『「上場企業における英語活用実態調査」報告書』

国際ビジネスコミュニケーション協会(2016) 『TOEIC Program 教員採用試験における活用状況』

- 間中和歌江. (2015). 「TOEIC 対策授業における CLIL 型学習方法の試み: 英語学習とキャリア教育の連携の可能性を考える」. 『東京純心女子大学紀要』, (19), 79-83.
- 中條清美 (2003) 「英語初級者向け『TOEIC 語彙 1、2』の選定とその効果」『日本大学生産工学部研究報告 B(文系)』 36, 1-16.
- Newfields, Tim (2005) "TOEIC Washback Effects on Teachers: A Pilot Study at One University Faculty." *The Economic Review of Toyo University* 31.1, 83-105. Otsuma review: *The Bulletin of the Otsuma English Association*, (51), 57-66.
- Takahashi, Junko (2011) "An Overview of the Issues on Incorporating the TOEIC test into the University English Curricula in Japan." *Tama University School of Global Studies Bulletin*, 4, 127-138.
- Uemura, Takashi. (2013). Implementing content and language integrated learning (CLIL) approach to TOEIC preparatory lessons. *Asian EFL Journal*, 15(4), 305-323.